



私見・認知科学の展望

大津 由紀雄*



昨今、人工知能と並んで、認知科学ということばは流行語の気配さえ感じさせる。広く知られているように、第4回京都賞の基礎科学部門の対象領域に認知科学が選ばれ、チョムスキーがその荣誉に輝いた。しかし、「認知科学とは、こころの構造とその機能を解明しようとする研究プロジェクトの総称である」といった程度の領域規定しかされていないから、一口に「認知科学」といっても実に多種多様である。

たとえば、わたくしの育ったMITの認知科学の風土は生成文法主導の認知科学である。それは、認知科学センター長に言語学・哲学科長(当時)のカイザーが、委員長にはチョムスキーが就任したことを見れば、一目瞭然であろう。

前の段落の「わたくしの育った」という修飾表現は、「MIT」に対して制限的に使われている。同じMITであっても、AIラボやコンピュータ・サイエンス学科となるとその様子は一変する。同じ学内にあってもこの有様だから、北米大陸の東と西では大分様子が違う。研究領域・方法論といった点での違いはもちろんのこと、研究態度というか学風というか、そんな点での違いも大きい。

周知のように、日本でも認知科学会という学会がある。最近出版された『AI事典』(UPU)に「日本認知科学会」の項目を執筆した波多野誼余夫のことは借りれば、現在多数派を構成しつつあるのが「情報系」、続いてかつては主導権をもっていた「心理系」、あとは少数派の「言語・哲学系」、「神経科学系」ということになる。つまり、正統派生成文法系をもって任ずるわたくしなどは少数派である。波多野も言っているように、認知科学の発展のためには「出身分野を超えた相互理解が決定的に重要である」が、出身分野の区分と方法論の区別がかなりのところ重なり合うというのが現状であるので、やはりどう考えても少数派という意識が先に立つ。その点で、認知科学分野の京都賞をまでするチョムスキーが受賞したことは嬉しい限りであった。

そういったことはあるのだが、認知科学会での活動

を含めて認知科学関係の活動というのは、なにか心を沸き立たせてくれるという否定しがたい思いがある。一つには、いわゆる長老政治といったものがないからである。若い研究者がのびのびと活動できるという当たり前だが、これまで(おそらくは)どの分野でも実現が難しかったことが実現した。そのことと関連すると思うのだが、学閥の壁といったものほとんどない。そして、既成の研究領域とか方法論にこだわることなく、研究課題を設定し、研究を遂行することができる。

話はアメリカに戻るが、アメリカにおける(そして、間接的には世界的規模における)現在の認知科学の隆盛をもたらした要因の一つとして、アルフレッド・P・スローン財団による研究助成金を忘れることはできない。1970年代後半、財団は「特定研究」の対象として認知科学を選定し、その後数年間にわたり総額2,000万ドルの助成を行なった。スローン財団の助成というのは重点的かつ短期集中的で、助成対象領域を絞り込むとそこに短期間(普通は、5~7年ほど)に多額の助成金を与える。助成期間内の中間査定も行なわれるが、通常、助成期間の更新はしない。

冒頭で述べたMITの認知科学センターもこの助成金により設立されたものである。同じ頃、アメリカ合衆国のほかの多くの大学にも認知科学センターが設立されたが、それらもまた、この助成金によるものであった。助成開始後もいろいろな紆余曲折があったが、この助成金が認知科学発展のために果たした役割はきわめて大きい。現在では、各地の認知科学センターに加えて、いくつかの大学で認知科学科が開設され、活発な研究・教育活動を行なっている。外なる宇宙の開発とともに、内なる宇宙の探求に大いなる期待が寄せられている。

振り返って、日本の現状を見るといささか心もとない。確かに認知科学会が存在し活発な研究活動が行われてはいるが、多少乱暴な言い方をすれば、それはいわば「本来の」研究分野を根城に、野心ある研究者が個人の努力として行っている研究活動である。そうではなく、認知科学をやりたいと思う研究者がまさにそこを根城とすることができる機関がほしい。大学内の

* 慶應義塾大学言語文化研究所助教授

認知科学センターという形でもよい、認知科学科という形でもよい、さらにはまた、独立の認知科学研究所という形でもよい。そうした器があって、その中で個々の研究者が既成の学問領域や方法論にとらわれることなく、自由に討論し合いながら研究を行なうことができれば、と思う。

最近、認知科学研究組織の誕生を切望する気持ちが強くなったのは、もう一つ理由がある。先ほど、「認知科学関係の活動というのは、なにか心を沸き立たせてくれるという否定しがたい思いがある」と書いた。その思い自体に変化はないのだが、6、7年ほど前の一種の興奮状態が終わり、なにか醒めたものを感じる事が多くなった。自分とは異質の学問的背景をもった、しかし、少なくとも類似した学問的興味を持つ仲間たちと語り合える場を提供してくれる認知科学の魅力に一目惚れしてしまっていたのは、わたくしひとりではあるまい。しかし、時間の経過とともに落ち着きを少し取り戻してみると、これまでどちらかという総論に偏りすぎていたという思いが過ぎる。もちろん、認知科学の発展のために、それは必要な過程で後悔があるわけではない。ただ、これからは積極的に各論に進んでいかなくてはなるまい。そして、得られた研究成果を着実に蓄積していく必要がある。そのためには、認知科学の研究機関が不可欠のもののように思えるのである。

わたくしが認知科学の研究・教育のための機関を切望する理由がさらにもう一つある。ガードナーの『認知革命』の翻訳の書評であったかと思うが、認知科学の歴史と現状をあれだけ克明に跡づけた著作に、日本人研究者の名前が見当たらない(ほとんど見当たらない?)という点を嘆いておられた方がいた。同感である。これまでのところ、日本の認知科学は国外の研究パラダイムに依存して研究活動が行なわれてきた感が強い。今後はそうした事態を脱して日本独自のパラダイムを作り上げる努力が必要であろうし、さらに言えば、日本とか外国とかいうことを越えて世界的規模で展開されていく認知科学プロジェクトの一翼を担うことができるようにならなくてはなるまい。そのためにも、認知科学の研究・教育のための機関がぜひ必要であると考え。

こうした理由から、「日本のスローン」の出現が切に待ち望まれるが、それだけでは事は成就されまい。事実、スローン財団の認知科学助成決定の裏には、認知科学者による長期間にわたる基盤作りの努力があったことを忘れてはならない。

さて、慶應義塾大学には言語学科がないので、わたくしが現在所属している言語文化研究所は慶應における言語学の研究・教育の中核となっている。研究所に

は、カツやチョムスキーのもとで Ph. D. 論文を物した西山佑司さんがずっと以前から専任所員としておられ、慶應における生成文法の研究・教育の環境整備に力を注いでこられた。わたくしが2年前にこの研究所に赴任してからは、二人で協力してさらに充実した研究・教育環境を作り出すべく努力を重ねている。現在までに、統語論・形態論・意味論・音韻論・語用論・言語哲学・言語心理学・社会言語学などきわめて充実した講義科目が準備され、こうした科目を中心に受講する学生の数も年々増加している。

これらのコースで取り上げられている言語学は、言語の記述に重点をおいた伝統的な言語学ではなく、「自然言語の文法はなぜかくあるのか」という問に対する解答を与え得る説明的理論の構築を目指す言語学である。これをひとこと言えば、まさに認知科学的なオリエンテーションを持った言語研究であるということになり、その点、既設の言語学科とは趣が異なる。今後は、学生たちが言語研究の認知科学的意味合いをより鮮明に実感できるようなカリキュラムに近づけていきたいと思っている(ただし、この時点ではこれはあくまでわたくしひとりの考えである)。

また、研究面においても、学内・学外の研究者との交流が盛んである。幸い、慶應には心理学・情報工学・神経生理学・哲学・記号論理学、それに英語学や仏語学など個別言語の言語学といった分野の研究者が揃っている。そうした知的資産を有効に活用しなければ罰が当たる。このように、研究にしても、教育にしても、より充実した学問環境作りのために、かなり地道な努力を重ねているつもりである。同じような地道な努力が他の大学、他の研究機関で積み重ねられていくことが認知科学の将来のために不可欠な要素ではないかと考えている。

つまり、認知科学研究者の側の研究・教育基盤作りと外部財源からの研究助成とがタイミングよく出会ったときに、わたくしの望む認知科学センターなり、認知科学科なり、認知科学研究所なりが誕生することになる。そして、それが実現したとき、認知科学の研究成果が着実な形で蓄積されることが可能になるであろう。

慶應からの助成を受けて、わたくしは来年の2月ごろからしばらくの間 MIT の認知科学センターへ客員研究員として赴くことになっている。わたくし自身の研究を深化させることが第一の目的であるが、同時に、およそ10年前アメリカ全土に出現した認知科学センターのその後をこの目で確かめたい、そして、日本の認知科学研究の歩むべき方向を自分なりに整理してみたいと思っている。